

谷崎潤一郎新資料紹介

—— 芦屋市谷崎潤一郎記念館寄贈寄託書簡

永井 敦子

本稿では、芦屋市谷崎潤一郎記念館に寄贈寄託された新資料を紹介する。二〇〇六年に指定管理者制度となってから所蔵された新資料を紹介する図録『芦屋市谷崎潤一郎記念館資料集(4)寄贈寄託書簡 平成十八年～二十二年』(二〇一一年六月)にて、谷崎関連書簡を紹介した。

今回はそれ以降に寄贈寄託された書簡および資料を取り上げ、翻刻、解説を行う。

【凡例】

- ・年代順に配列し、通し番号を付した。
- ・書簡の表記については、漢字は新字体、仮名遣いは原文どおりを原則とした。ただし、変体仮名などについては通行の字体に改めた。なお、人名については原文どおりとした。
- ・原文に濁点のないものはそのまま表記した。
- ・破損、汚れ等による判読不能の箇所は□とし、抹消は■とした。
- ・書簡本文の行間に書き込まれたものは「」で括った。
- ・書簡翻刻文中の一文を区切るスペースと改行は、原文および文意を勘案の上翻刻者が施した。

・日付は書簡本文に付された日付を基本とした。

・郵便種別については、(速達)(書留)等として適宜記した。解説において参照した、書簡翻刻文が掲載された全集および書簡集を、便宜上、以下の名称で示す。

『谷崎潤一郎全集』↓旧全集

(中央公論新社、昭和五十六年五月～五十八年五月)

『谷崎潤一郎全集』↓新全集

(中央公論新社、平成二十七年五月～二十九年六月)

千葉俊二編『父より娘へ 谷崎潤一郎書簡集 鮎子宛書簡

二六二通を読む』(中央公論新社、平成三十年十月)

↓鮎子宛書簡集

『芦屋市谷崎潤一郎記念館資料集(3)久保家所蔵

谷崎潤一郎 久保義治・一枝宛書簡』

(芦屋市谷崎潤一郎記念館、平成十一年三月)

↓久保宛書簡集

・全集の巻数は丸数字、書簡番号は漢数字で示した。

1 小倉敬二宛書簡 昭和四年十二月十一日

〔封書、原稿用紙二枚、毛筆〕

受信 大阪市中之嶋 大阪朝日新聞社整理部 小倉敬二様

御直披 (書留)

発信 阪急沿線岡本 谷崎潤一郎 十二月十一日

〔切手〕 十三銭一枚

〔消印〕 御影 4.12.11 后2-4 (引受局)

大阪中央 4.12.11 后6-7 (配達局)

〔備考〕 證達 (貼紙後半剥落)

拝啓

先日は失礼いたしました その節申上げました北野氏の会の勘定別紙の如く送つて参りましたから御願ひいたします、直接御送り下さるなら

大阪市南区三ツ寺町三番地

千福旅館

にて届きます、その方が手が省けて結構です、御送り下さつたら一寸私宅へも御しらせ願ひます

近日予告御送りいたします、題二つ三つ考へましたが選定中です

十二月十一日

谷崎潤一郎

小倉敬二様

侍史

〔注〕

小倉敬二 大阪朝日新聞社の記者。

解説

この書簡は、二〇一一年五月、朝日新聞社の関係者のご遺族から寄贈された。

書簡にある「北野氏」とは、日本画家の北野恒富のことであろう。谷崎は、昭和五年三月から『東京朝日新聞』(三月十八日～九月六日)、『大阪朝日新聞』(同～九月五日)にて「乱菊物語」を発表、挿絵を北野恒富が担当した。恒富とは、のちに三度目の妻となる根津松子とその夫根津清太郎とのつながりで親交を深めた。大衆小説と自ら銘打った「乱菊物語」の掲載に際し、大阪を代表する日本画家北野恒富が挿絵を手掛けた。この書簡に示される「北野氏の会」は、そうした事情を含んだ会合で、作品や挿絵について話し合ったと考えられる。その際に生じた飲食費等の支払いを、大阪朝日新聞社に求めたものと思われる。

また、「題二つ三つ考へましたが選定中」とあり、昭和四年十二月中旬の段階で、「乱菊物語」のタイトルはまだ決まっていないことが示されている。なお、「乱菊物語」の構想について谷崎が恒富に宛てた書簡(昭和四年十二月十三日)は新全集⑮(五二〇～五二二頁)に紹介されており、作品の中断について述べた小倉敬二宛谷崎書簡(昭和五年八月二十四日)は旧全集⑳(一〇七)に掲載されている。

2 筒井大助宛書簡

昭和五年二月二十四日

〔封書、原稿用紙二枚、毛筆〕

受信 県下飾磨郡家嶋 家嶋小学校内 筒井大助様 侍史

発信 武庫郡本山村岡本 谷崎潤一郎 二四日

〔切手〕三銭一枚

〔消印〕御□ 5.2.24 后2-4

〔備考〕軸装

拝啓

御地滞在中ハ一方ならぬ御好意にあつかり御蔭様にて家嶋が最も収穫多く御芳情忝く存じます あれより室に二泊、飾磨に一泊昨二十三日帰宅いたしました

室の郵便局長さんハ是亦二日も仕事を休んで方々案内し下さいました、当方よりも書状差出しましたが御ついでの節宜敷御伝へ願ひます

福岡氏長尾氏庭山氏太川氏皆々様へも宜敷仰つしやつて下さ

拙歌之件其のうち何とか工夫いたします

二月廿四日

谷崎潤一郎

筒井大助様

侍史

〔注〕

家嶋 瀬戸内海東部の播磨灘に位置する島。かつては飾磨郡家嶋町に属していたが、二〇〇六年三月に兵庫県姫路市へ編入合併された。

室 兵庫県揖保郡御津町の地名。室津。播磨灘に面し、漁港があり、奈良時代は播磨五泊の一つに数えられた。

3 筒井大助宛書簡

昭和五年三月七日（年推定）

〔封書、原稿用紙二枚、毛筆〕

受信 県下飾磨郡家嶋 家嶋小学校内 筒井大助様 侍史

発信 武庫郡本山村岡本 谷崎潤一郎 三月八日

〔切手〕剥落

〔消印〕無

〔備考〕軸装

先日は早速御返事有難う存じました

さて一寸御尋ねいたしますが過日カハウソが魚を捕へる話とうかがひましたが、カハウソの姿を現はすのは一年中のいつの季節が多いのでせうか、時刻も夜とか朝とか大概定まつて居りませうか、如何ですか、アシカもいつが多く出るのでせうか、右至急御知らせ下されバ幸甚に存じます

今度の小説にハ家嶋を大いに書くつもりです

福岡様へよろしく

三月七日

筒井大助様

谷崎潤一郎

侍史

〔注〕

今度の小説 「乱菊物語」(『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』
昭和五年三月十八日〜九月六日)を指す。

解説

二〇一六年八月、筒井大助氏のご遺族から寄託された。書簡形状は、書簡二通(原稿用紙計四枚と封筒二通)が軸装されている。谷崎が兵庫県飾磨郡家嶋(現・兵庫県姫路市家嶋町)にある家嶋小学校の校長であった筒井大助氏に宛てた書簡である。

昭和五年二月、谷崎は「乱菊物語」執筆に際し、舞台となる家島群島・室津へ取材旅行した。翌三月から連載が始まり執筆を続ける中、八月十八日に谷崎は千代と離婚し、千代は佐藤春夫と結婚する旨を記した離婚挨拶状を、知友などに発送した。翌十九日の新聞各紙に大きく取り上げられ、「細君譲渡事件」として世間に騒がれた。事件以来来訪者が多く、落ち着いて執筆出来なくなり、意気込んで取り組んだものの一四八回で中止となった。

書簡の中で谷崎は、アシカが多く出る時期について質問しているが、「乱菊物語」に、「あしか」は一名「海驢」とも呼ばれるから、手つ取り早くいへば、海の中に棲む驢馬である」との記述や、「海鹿と馬との間に出来た」獣(海鹿馬)に乗っ

た男の登場などが描かれている。

4 谷崎精二宛書簡 昭和五年十月十五日

〔封書、原稿用紙(谷崎氏用箋)二枚、毛筆〕

受信 東京市牛込区喜久井町二十一 谷崎精二殿

発信 神戸市外阪急沿線岡本 谷崎潤一郎 十月十五日

〔切手〕三銭一枚

〔消印〕5.10.15 后2-4

〔備考〕軸装

鮎子の事早速ありかたう

入れてもらへればまことに結構なのだが、実はことしは既に此方の学校を退学して一と月以上にもなり、度々新聞などにも噂されて当人も気をくさらせてあるのでいつそ来年の三月まで休ませようかと思つてゐる、それで来年その時分になり入学出来ればと、勝手ながらさう思ふのだが、どうだらうか?とにかく今のうちから頼んでおいてもらへれば大変ありがたい。

小生先日一寸上京したが多分本月末に又上京する、宿は小石川佐藤方のつもり。その時知らせるから万平の事終平の事はその時詳しく話さう

右御返事迄

十月十五日

〔注〕

谷崎精二 谷崎の次弟。小説家、英文学者。エドガー・アラ
ン・ポーの翻訳者。早稲田大学教授。

鮎子の事 谷崎と最初の妻千代の娘。この書簡が出された
二カ月前の八月に生じた「細君讓渡事件」(書簡2・3解
説)が新聞記事になり、世間を騒がせたことが娘の鮎子
に弊害をもたらした。鮎子が在籍するカトリック系の小
林聖心女子学院から、不倫な家庭に子女を置くわけにい
かない、退学するか寄宿舎に入れるかと通告された。小
林聖心を退学した鮎子の進学先について、谷崎は東京に
住む精二や鮎子の元の担任に、東京の成女女学校に編入
できるよう頼んだ。

小石川佐藤方 佐藤春夫は、昭和二年三月に小石川区関口
町二〇七(現・文京区関口三丁目)に新築の家を建てて居
住していた。

万平の事終平の事 万平は谷崎の母関の弟で、終平は谷崎
の末弟。事業の失敗により谷崎家の生活が困窮し、万平
が谷崎の幼い妹伊勢と末を養子にして育てた(伊勢が明
治三十八年、末が三十九年頃。小谷野敦「谷崎潤一郎 詳
細年譜」)。その恩もあり、万平からの度重なる借金の申
し出に谷崎は応えた。

解説

この書簡は、二〇二五年八月に谷崎のご遺族高橋百百子氏
から寄贈された。原稿用紙二枚と封筒が軸装されている。書
簡の写真は、『生誕一〇〇年記念 谷崎潤一郎・人と文学展』
(朝日新聞社、昭和五十九年十月)に掲載されている。

書簡が出される二カ月前の八月、前述の「細君讓渡事件」
により、記者の取材が押し寄せるなど騒動の中にいた。書簡
に娘の鮎子が学校を「退学して一と月以上にもな」と記さ
れていることから、両親の離婚騒動により退学したものの、
「度々新聞などにも噂されて当人も気をくさらせてゐる」
状況であった。鮎子の進学先の相談という書簡の内容から、
娘の鮎子を千代と春夫妻の下で生活させながらも、進学先
など重要なことを手配する谷崎の姿が見出される。

叔父「万平の事」については、八カ月前の精二宛書簡(昭
和五年二月四日)にも、「まことに気の毒」だが大きな家(岡
本梅ヶ谷の家)を普請した借金や経費がかさみ、「今のところ」
対応できないことが示されている(旧全集②5一〇三)。

大正六年に母関、八年に父倉五郎を亡くした谷崎は、長男
であったことから、次弟精二と連絡を取りながら弟妹や親戚
の世話をし続けた。

5 勝呂先生宛書簡 昭和十一年三月十七日(年推定)

〔封書、原稿用紙(倚松庵用箋)一枚、毛筆〕

受信 勝呂先生 使者持参

発信 谷崎潤一郎 十七日

〔切手〕無
〔消印〕無

拝啓

茲に封入のものハエミちゃんの便でございますが、虫がゐるかどうか一遍御検査を願ひ度存ます 時々胃が痛い〜と申て居ります

尚小生ハナカゼがこぢれて喘息のやうにのどがゼイ〜申て居ります熱は少しもありませんが御投薬願度此の使の者に御渡し願ひます

近頃午前中より夕刻まで大概毎日甲南荘へ通つて居ります、こゝの一室を仕事部屋に使つて居ります、便の様子ハ夕刻電話にて御伺ひいたします

三月十七日

谷崎潤一郎

勝呂先生

侍史

〔注〕

勝呂先生 肛門科の医師。兵庫県西宮市に開業していた。

エミちゃん 三度目の妻松子と前夫根津清太郎の娘恵美子。

昭和二十二年に谷崎家の次女として入籍した。「細雪」時

岡幸子の娘悦子のモデル。

甲南荘 阪急夙川駅から北へ千メートルほどにあった、三

階建ての洋館アパート。谷崎はここに滞在し、執筆活動

を行った。(宮崎修二郎「甲南荘跡」『文学の旅・兵庫県』)。
また、片岡鉄兵や大岡昇平、千葉亀雄なども居住したという。

解説

二〇一七年九月に勝呂医師のご遺族から寄贈された。

宛て名にある肛門科医師「勝呂先生」は、松子の古い知人で、谷崎も昭和十二年四月に「痔瘻をやみて勝呂病院入院」し、手術した(谷崎松子「主おもむろに語るの記」新全集²⁶)。

封筒には宛名と「使者持参」とあるだけで年未詳であるが、倚松庵用箋が用いられていることから、この用紙が使用されるようになる昭和七年二月以降であり、さらに松子の娘恵美子の「便」を医師に送っている点から、すでに松子と結婚し

生活を共にしている様子が窺われ、打出の家で祝言を挙げた昭和十年一月以降であると思われる。

また、書簡中に「大概毎日甲南荘に通つて」いるとある。

「甲南荘」については、小谷野敦「谷崎潤一郎 詳細年譜」

に和気律次郎宛谷崎書簡(昭和十一年一月三十日)が紹介され、「改造」の小説を書くため甲南荘へ通っている」と記されている。「改造」の小説とは、「猫と庄造と二人のおんな」

(『改造』昭和十一年一月、七月)を指す。宮崎修二郎『文学の旅・兵庫県』の甲南荘の説明にも、「谷崎氏も原稿執筆に芦屋から通つて来た」との記述がある。これらのことから、本

書簡は、昭和十一年三月、芦屋「打出の家」時代のもものと推定する。

6 嶋川信子宛書簡 昭和二十一年五月七日

〔封書、原稿用紙五枚、毛筆〕

受信 兵庫県尼崎市玄番北ノ町三〇 布谷伊光様方

嶋川信子様 (速達)

発信 京都市左京区浄土寺西田町十二

戸嶋孚雄様方 谷崎潤一郎 五月七日

〔切手〕剥落

〔消印〕㊦ (切手剥落により㊦のみ印字)

拝啓

御無沙汰してゐますが御元氣の由大慶に存じます、御寮人が、誤解のないやうに一度私からあなたに直接説明せよとの事なので此手紙を書きます

私の第一の注文ハ、姉妹の仲が睦しいのは結構ですが家庭に深く立ち入られることがいやなのです、戦争中ハ已むを得なかつたとして、此の機会に、その弊害を除くため一日も早くあなたに別居してもらひたいのです、その上で又お互に助け合ふとか、困難の場合に相談相手になるとか云ふことは当然のことです

今度私〔たち〕は重子さんもエミちゃんも京都の方へ移るかも知れませんが勝山の二階はあのまゝ借りて置き、時々泊りに行くつもりです、それで彼処■は松田夫婦にでも留守番をしてもらひますが、あなたはあの家と關係を切つて他に部屋借り■して下さい、彼処は何処までも私の家としておきます、

先づさう云ふところからハツキリ区別したいのです

嶋川君が帰還したら我々としても大いに労をねぎらひ温い手をさしのべたいと考へてゐますが、しかしさう云ふ区別だけハ守つて頂きたいのです

重〔子〕さんに対してもいづれ別居して貰ふやうになると思ひます、たゞ重子さんにハ私としても今の御寮人と結婚した時から一方ならぬ御世話になりましたのでその恩義を忘れることが出来ません、又渡邊さんと結婚なさる時、私が無理にすゝめた關係上、どうしても此の御夫婦を幸福にして上げる責任があります、

それで今暫く、渡邊さんが重子さんを引取られるだけの用意が出来るまで、お預かりしてゐるつもりであります、依て先づあなたから始めて貰ふのです

従来、あなたや嶋川君が御寮人に取次をして「小生の知らぬうちに」物品の買売や金の融通などをされたことがありましたがこれハ御寮人の方が悪いのですからあなた方を責める筋ハありません、しかし兎角弊害がありますから今後हतとひ御寮人から話があつても是非断るやうにして下さい、昨日もお春どんが■夏物の御寮人向き衣類を売りに来ましたが、これもいづれ宗像さんやあなたが仲に立つてゐること、思ひます、御寮人も見ればほしくなりますから、今回だけハ或は売つて頂くかも知れませんが、今後かう云ふものは一切持ち込まないで下さい、たとひ米、味噌、砂糖、油のやうな生活必需品と云へどもあなたの手を経て購入することは今後見合せるやうに御寮人と相談しました、薬品なども直接購入するやう連絡をつけました、どうしてもあなたの力を借りる必要

が起つた場合には私から改めて御願ひします

青谷の家賃取立なども私の方で別に人を雇ふことにしました
要するにあなたが既に他家に縁づかれた者であることを認め、
拙宅の家事には絶対関係せぬやうにして貰ひたいのです、(今
日迄のことは、御寮人が妹たちに余り事を任せ過ぎたのでか
うなつたのです、決してあなたが悪いものではありません)私
としては、立派な夫のある義理の妹に家事を頼むよりは寧ろ
他人を秘書に雇つてそれにやらせた方が気が持がよいのです
それから今度お花見にあなたを除外したことについて説明し
ます

戦争中、私はあなたを生命の危険から庇護するやうに、嶋川
君に依頼されました、それで私は熱海時代から度々あなたを
呼び寄せやうとしたのですがあなたは時々遊びに来られるだ
けで、思ひ切つて魚崎を引揚げてハ来られず、荷物も送つて
来られなかつた、その後津山から勝山へ一家が疎開するやう
になり漸くあなたも我々と合併されたが、我々の生活とは少
しも同化されなかつた、あなたは宗像さんのやうな我々には
縁のうすい妙な食客までつれて来ながら、(此の人は最初は別
に部屋借りするとか、女中代りに働くと云ふ振れ込みでし
たが全然うそでした) 始終宗像さんと代るく、神戸方面へ遊
び(に)ばかり行つてをられた、そして田舎へ戻つて来れば、
旅の疲れが出て病気になることが多かつた、私には
あなたがどうしてあんなに神戸へばかり出て行くのか理由が
分らず不愉快であつた、私(に)はあなたが神戸方面でどん
なことをしてゐたのか分らない、(あなたは御寮人に買物を頼
まれたのだと云ふかも知れないが) 私から見れば御寮人を始

め皆がじつと田舎で辛抱してゐるのにあなただけ勝手に飛び
歩いてゐるやうに見えた、たまに勝山にゐる時でも、前述の
如く疲れて臥てゐることが多いので、重子さんやエミちゃん
の方が本当によく手助けになつた、殊に重子さんは黙つて、
何も云はないで、実によく働いて下すつた、妹のあなたが何
もしないので、世間体が悪いやうにさへ私は感じた、当時私
はあなたに対し忠告しようと思つたこともしばしばですが、
戦争中ハ家庭内の平和を保つことが第一と考へ辛抱してゐま
した、そして終戦になつてからは、むしろあなたに出て頂く
方がよいと考へた次第であります

そんな訳ですから、今度は私が留守番がする番だと云つて、
あなた(の)方から進んで辞退されるくらゐが当然だと思つ
たのであります

過ぎ去つた事ハこれ以上申しますまい、あなたが他家の人間
であると云ふ立ち場を取つて下されば、何も云ふことはあり
ません、

何卒私の心持を諒解して下さい

五月七日

潤一郎

信子様

〔注〕

嶋川信子 妻松子の末妹(四女)、こいさん。「細雪」の四女

妙子のモデル。

御寮人 谷崎松子。

嶋川君 信子の夫嶋川信一。ゴルフのレッスンプロをしていた。昭和十九年四月四日に姫路へ入宮した（鮎子宛書簡集二二三）。

渡邊さん 松子の妹重子（「細雪」三女雪子のモデル）の夫渡辺明。「細雪」三女雪子と見合いし結婚する御牧実のモデルとされる。二人は昭和十六年四月に結婚。明は昭和十九年七月に仕事のため北海道に移住することとなったが、重子は谷崎らと共に疎開した。明は旧津山藩主松平康民の三男で、津山に兄松平康春が所有する松平別邸「愛山宕々庵」があり、疎開した谷崎一家が仮住まいした。

お春どん 谷崎家のお手伝いを勤めた久保一枝のこと。「細雪」静岡幸子宅の「女中」として、同名で登場する。昭和十年から谷崎家に奉公し、十六年に辞して久保義治と結婚。義治は復員後、谷崎から秘書的な業務を任された。昭和二十二年、京都に古書店を開業した際は、谷崎に「春琴書店」（のち「春琴堂書店」）と名付けてもらうなど、谷崎家との交流は生涯続いた。

宗像さん 信子の友人。

青谷の家賃取立 現・兵庫県神戸市灘区青谷町。当時谷崎は、「神戸の借家三軒だけ助かり（中略）借家人を追立て引移らんか」と考えたことが、土屋計左右宛書簡（昭和二十年九月六日、旧全集②九九）に記されている。借家を所持し、貸し出して家賃収入を得ていた。これらの家は、「外人向きの家賃」で、「或るトルコ人を買って貰った」という。その時の十万で、昭和二十一年十一月に南禅寺下川原町の家屋を譲り受けた（「三つの場合」）。

魚崎 魚崎町魚崎七二八ノ三七（現・神戸市東灘区魚崎中町四丁目）にあった谷崎宅。反高林の家（現・倚松庵）を、

昭和十八年十月に退去し、住吉川を挟んで東岸にある魚崎の借家に移った。しかし、昭和十七年四月、谷崎は熱海西山に別荘を購入し、ここで「細雪」を執筆していたことから、魚崎の家にほとんど住んでいない。

津山から勝山へ一家が疎開 戦局の悪化により、谷崎は昭和十九年四月に松子らを熱海の別荘に疎開させ、昭和二十年五月に熱海から魚崎の自宅に一旦戻り、岡山県津山市へ再疎開し、松平別邸に仮住まいした。七月には同県勝山町小野はる方へ移り、十二月三十日に同町の今田ツネ方に転居。翌二十一年の五月に家族で京都に移住した後も、八月に避暑を兼ねて単身で今田方に滞在し執筆した。

解説

この書簡は、二〇一六年十一月に、信子の知人を通じて寄贈された。

宛名となっている信子の滞在先、尼崎市玄番北ノ町の布谷伊光は、航海計器をつくる布谷計器製作所の社長で、伊光の妻章子が松子の従妹という親戚関係であった。工場と家が尼崎にあり、戦時中、尼崎の実家に戻った久保一枝が、布谷の工場に勤めていた時期もあった（「疎開日記」）。

昭和二十年六月十四日（年推定）の久保一枝に宛てた谷崎の書簡（久保宛書簡集二十一）には、「昨夜布谷の章ちゃんが此方へ逃げて来」たとあり、岡山に避難して来たことが記され、「津山も今は章ちゃんの子供二人、こいさん、平松のをば

ちやん等皆やつて来て満員」とある。その一か月後、同じく一枝に宛てた書簡（七月十二日、旧全集²⁵二九二）で、「こいさんと布谷さんと宗像さんとで何とかトラックを都合して魚崎の家の荷物を」運ぶことになったため、「こいさんはまだ魚崎に残つてゐる」と書き送っている。「布谷さん」とは伊光のことであろう。

勝山で終戦を迎えた後、谷崎は十月二十一日に布谷伊光と共に尼崎へ向かい、二十四日まで同家に泊まっている。戦後も布谷家との親しい親戚付き合いを続けていた。

差出人住所を見ると「京都市左京区浄土寺西田町十二戸嶋孚雄様方」となっている。谷崎は、疎開先の勝山から昭和二十一年三月に単身で上洛し、京都の旅館喜志元に身を寄せた。四月二十七日に喜志元を引き払ってから、五月二十日に上京区寺町通今出川の中塚せい方に間借りするまで、銀閣寺終点付近にある戸嶋方の二階を借りて住んだ。ここは、「二室のみにて訪客を通す座敷さへもなく全くの腰掛」であると、川端康成宛書簡（同年五月七日、旧全集²⁶六七九）に書き記している。

同じく戸嶋方から、尼崎の久保一枝に宛てた葉書（昭和二十一年五月十日、久保宛書簡集二七）を見ると、「布谷まで行かうと思つてゐるのですがこいさんがまだ泊つてゐるらしいので遠慮してゐます」と記し、信子がいつ頃出立するか一枝に問い合わせている。訪問する布谷家への気遣いや、信子と重ならないよう配慮する心情が見出されよう。

7 廣井文子宛書簡 昭和二十三年七月四日

〔封書、原稿用紙一枚、毛筆〕

受信 東京都中央区銀座七丁目四番地 話社（住所印）方

廣井文子様（速達）

発信 京都市左京区南禅寺下河原町五十二番地

谷崎潤一郎（住所印・氏名印） 七月四日

〔切手〕 一円二十銭一枚、四円一枚

〔消印〕 23.7

〔備考〕 受信の住所（東京都〓話社）までは住所印、それ以降は谷崎筆。

拝復

七月一日附御手紙拝見、左記御返事申上候

御申越之「富美子の足」は小生気に入らぬ作品に付これハ御断り致候、その代り大正十年頃一度朝日に連載したる長篇にて「肉塊」と申すもの有之、これハ余り世間に流布して居らず、わりに今でハ知らぬ人も多しと存じ候、此のうちの一節を七八十枚抜萃して矢張「肉塊」と申す題にて掲載致度、富美子よりも此の方一層女態小説たるの内容を有し候

原稿料ハ二万円頂戴致度候、原稿ハ旧作に小生多少の修正を加へたるものを東京に居る書生に持たせ貴社に御届け可致、その時右書生に現金にて引換に御渡し被下べく候

右之通りにて如何に候哉、今一度御返事下され度候

七月四日

谷崎潤一郎

廣井文子様

〔注〕

「富美子の足」『雄弁』（大正八年六月～七月）に発表。美術
学校生の宇之吉が遠縁の隠居塚越に頼まれ、愛妾富美子
の油絵を描き、病状が悪化した塚越に代わって美しい足
を愛でて戯れるなど、フットフェティシズムを描いた作
品。なお、自選全集『谷崎潤一郎全集』（中央公論社、昭
和三十三年一月～三十四年七月）に「富美子の足」は収
録されておらず、書簡で「気に入らぬ作品」という谷崎
の言と合致する。

「肉塊」『東京朝日新聞』（大正十二年一月一日～四月二十
九日）『大阪朝日新聞』（同く五月一日）に発表。映画ス
タジオを作り高級映画の製作に没頭する吉之助が、理想
の美女グランドレンを人魚役に配し、彼女の肉体美に溺
れ低級な映画製作に陥るさまが描かれている。

8 廣井文子宛書簡 昭和二十三年七月十一日（年推定）

〔封筒のみ〕毛筆

受信 中央区銀座七丁目四番地 家庭社方 話社

廣井文子様 根津清治持参 「肉塊」原稿在中

発信 京都市左京区南禅寺下河原町潺湲亭（住所印）

谷崎潤一郎 七月十一日

〔切手〕無

〔消印〕無

〔備考〕次の「作者記原稿」と「名刺」が封入されていたか、
もしくは同時に手渡されたと思われる

【作者記原稿】原稿用紙一枚、毛筆

左に掲げるものは嘗て大正年代に「肉塊」と云ふ題で朝日新
聞に連載した長篇小説中の一情景である。此の小説は今では
余り知られてゐないやうに思ふので、今回本誌の乞ふに任せ、
その第四回と五回とを茲に抜萃することにした。（作者記）

〔注〕

作者記原稿 出版社に届けられた「肉塊」再録（抄録）原稿

に、同封されていたと思われる「作者記」自筆原稿。新全
集②にも収録されている。なお、依頼された「肉塊」再録
の原稿は封筒に残っていない。

【名刺】印刷（名前）、毛筆

〔表〕根津清治御約束の原稿持参致候ニ付金子此者に御渡し
被下度候

谷崎潤一郎（印刷）

話社

廣井文子様

（裏）京都市左京区南禅寺下河原町五二電話上二七二番

（印刷）

〔注〕

根津清治 妻松子と前夫根津清太郎の長男。書簡5恵美子の兄。川端康成宛の書簡(旧全集②六八〇)に、「使は根津清治と申す親戚の青年にて日大の学生」(昭和二十一年五月三十一日)と記されている。日本大学に通い、下目黒に住んでいた。また、昭和二十三年の清治宛谷崎書簡(九月二十四日、旧全集②三二五二)の宛て先も下目黒で、書簡には、中央公論社の嶋中氏に面会し、京都に送金したか確認するよう、谷崎からの指示が示されている。京都在住の谷崎に依頼され、東京での用件を代行していた。

9 廣井文子宛書簡 昭和二十三年七月十二日(年推定)

〔葉書、毛筆〕

受信 東京都中央区銀座七丁目四 家庭社方 廣井文子様
発信 京都市左京区南禅寺下河原町五十二番地
谷崎潤一郎(印刷)

〔切手〕 二円一枚

〔消印〕 左京 □3.7.13

〔備考〕 C.C.D (CP) 印有り

七日附御書面拝見致候 原稿すでに持参致させ候ニ付御受取
被下度候 写真の件承知いたし候
七月十二日

〔注〕

写真の件 「肉塊」が再録された『日本名作小説 第一集 五大作家女態小説特集』の表紙裏に、「執筆者肖像」として谷崎、里見淳、菊池寛、吉川英治、石川達三の顔写真が掲載されている。

解説

二〇二三年二月、廣井文子氏のご親族から寄贈された。廣井氏は、谷崎に原稿を依頼してきた話社(家庭社)の編集者である。話社および廣井氏が谷崎に原稿を依頼した経緯は管見の限り不明であるが、掲載誌の奥付を見ると、編集兼発行人として「増永善吉」の名がある。増永は、昭和十四年に鱒書房、三十三年に郡山書房の社長となった出版人で、刊行した雑誌『夫婦生活』が人気を博すなど、さまざまな作家との繋がりがあったと思われる。

「肉塊」(再録)の掲載誌『日本名作小説 第一集 五大作家女態小説特集』(昭和二十三年十月)の奥付に記された発行所が「家庭社」で、住所は「千代田区内幸町二ノ三(幸ビル)」とあり、書簡宛て先の住所とは異なる。「あとがき」を見ると、「最近別冊式の読切傑作小説特集が流行」しているが「力作揃い」とは言えず、「読者に充分なる満足を与えたいという目的を以て、有名大家の後世に残る不朽の名作のみを集めて『名作小説』として」世に出したと廣井氏が述べている。この趣旨に賛同した作家として、谷崎や菊池寛など五名の名を挙げている。

「話社」は、文藝春秋社から刊行された総合読物雑誌『話』(昭和八年四月〜十五年五月)を継続し、復刊させている。

本誌の四か月前、雑誌『話』の復刊として、『名作雑誌(話 復刊)』第一巻第一号(昭和二十三年六月)が『五大作家愛艶小説特集』を組んで刊行されており、菊池寛や里見淳など五名の創作が掲載されている。奥付の「あとがき」には、「昨秋故菊池寛先生より(中略)雑誌『話』の発行権を譲り受け、菊池の指導下で編集方針を検討していたが菊池の逝去により、「実話雑誌としての『話』」は保留し「別個に本誌を企画」し刊行したと記されている。発行所は話社で、社の住所は本書簡の宛て先と同じである。さらに、表紙(裸婦像)や奥付など、形態が『女態小説特集』と同じである。

また、この「肉塊」の挿絵は、新聞連載時は田中良であったが、今回は佐野繁次郎が担当している。佐野は小出楯重に師事した洋画家で、「夏菊」(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』昭和九年八月四日〜九月八日)や、『初昔 きのうきょう』(創元社、昭和十七年)などの谷崎作品の挿絵や装丁を手掛けている。

本誌の挿絵を見ると、裸体のデッサンが大きく描かれ、『女態小説特集』の名にふさわしいが、画の筆致は力強く、うな垂れた頭が裸の upper body を覆っており、胸などの描写はない。表紙絵は、黒田清輝に師事した洋画家田辺至が手掛けた裸婦像で胸も描かれており、性的なイメージが打ち出されている。

なお、本資料 8・9 は年未詳であるが、話社との一連の遣り取りの中に入ることから、同じ昭和二十三年のものと同定する。

10 長谷川清三郎宛書簡 昭和二十九年九月四日(年推定)

〔封書、巻紙、毛筆〕

受信 長谷川清三郎様

発信 京都市左京区下鴨泉川町五番地(電上一八四四)

谷崎潤一郎(住所印・氏名印) 九月四日

〔切手〕無

〔消印〕無

拝啓

戦争前に御目に懸候 以来随分久しく御無沙汰申上居候処 御高齢にも不拘お元氣にて御暮し被遊候趣蔭ながら御喜び申上候

さて甚だ突然の儀にハ候へ共小生今のうちに自分の幼年時代のこと祖父母以来の谷崎家の事などを出来る限り書き留めて置き度と存じ先づ何よりもあなた様に昔のことを話して頂き度と思ひ立ち候 就きましてハ小生自身参上のうへ御願ひ申上べき筈のところ老来まことに意気地なく相成遠方の旅行など思ふにまかせぬやうに相成候ニ付勝手ながら小生代理として秘書小瀧穆氏参上致候ニ付御引見の上何分宜敷御願申上候 尤も小生も冬は熱海の方へ毎年避寒仕候ニ付その時分体の工合の宜しき折を見て御伺ひ致度と存し居候

猶詳細ハ小瀧氏より御聞取り被下度氣候不順の折柄御自愛祈上候

九月四日

谷崎潤一郎

長谷川清三郎様
侍史

〔注〕

自分の幼年時代のこと、書き留めて置き度。「幼少時代」執筆に際し、谷崎は親戚や知人などに谷崎家のことや明治の東京日本橋に関すること等を手紙で質問するなど、取材を重ねて執筆していた。

秘書小瀧穆氏 中央公論社の小瀧穆は、昭和二十三年に退職した後、谷崎の個人秘書を勤めた。しかし、昭和三十五年に電話で行き違いが生じ、交際は途絶えるが、谷崎逝去（昭和四十年七月）の際、すぐに駆け付け、通夜から告別式までの裏方を務めた。

解説

谷崎の叔父（母関の弟）長谷川清三郎氏に宛てた谷崎書簡。二〇一九年五月、ご遺族から寄贈された。

切手、消印、宛て先もないことから、人づてなど手渡しによつて届けられたものとみられる。差出人住所は、京都下鴨「潺湲亭」（昭和二十四年四月～三十一年末売却）である。谷崎は、明治半ばに東京の下町で過ごした自身の生い立ちから小学校卒業頃までを回想した「幼少時代」（『文藝春秋』昭和三十年四月～三十一年三月）を発表した。執筆に際し、聞き取り取材を行っており、本資料もその取材をお願いする書簡である。

書簡は年未詳だが、「幼少時代」の掲載が昭和三十年四月に

始まっており、書簡に、「先づ何よりもあなた様に昔のことを話して頂き度と思ひ立ち候」とあることから、早い段階で依頼していると考えられ、「思ひ立ち」という突発的な表現に、調査の準備が整う前に先ず「書き出した当時には八十一歳になる」（『新版幼少時代序』）高齡の叔父の話の聞こうという姿勢が感じられる。

昭和二十九年七月末日に谷崎は、『新訳源氏物語』の「夢の浮橋」を脱稿し、大業を終え一息ついている。それから約一カ月後の九月に、本書簡を叔父清三郎氏に出したと考えられ、さらに十二月の巖谷栄二宛書簡（昭和二十九年十二月十一日、旧全集②⑤一八）には、「今度「幼少時代」と題する小生子供の時の思ひ出を少々長く書くつもりにて（中略）暫くお貸輿被下度貴重品の品をまことに申兼候」との言がある。巖谷から『少年世界』や『太陽』を資料として借り受け、執筆の準備を進めている様子が窺われる。これらのことから、本書簡は「幼少時代」発表の前年、昭和二十九年九月と推定する。

※貴重な資料をご提供下さいました方々に、心より感謝申し上げます。また、本稿の執筆にあたり、千葉俊二先生からご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。